

現代中国語指示詞の研究史

— “这、那” を中心に —

鈴木 進一

1 はじめに

本稿の目的は、現代中国語の指示詞、特に“这、那”を中心として、その使い分けや機能を中国ではどのように考えてきたのか、《馬氏文通》以降の代表的な6冊の文法書を基礎資料として、歴史的に順を追って整理していくことである。

中国語の指示詞は、ほとんどが「代詞」の下位分類として扱われている¹⁾。ここでいう「代詞」とは日本語の「代名詞」にあたるが、中国語では名詞を意味する「名」を取って、「代詞」と呼ぶのが一般的である²⁾。その理由は、例えば指示詞“这(これ、この)”は名詞的性格を持っているが、同時に形容詞的性格も持っている。また別の指示詞“这样(このような、このように、このようにする)”は形容詞的、副詞的、述語的性格を持っている。従って、指示詞は一概に名詞であるとは言えないのである。よって、その上位分類あたる「代詞」には名詞を意味する「名」が付けられないことになる。

最初に、本稿における記号の使い方および例文とその訳について、断っておくことにする。本文中(ただし例文を除く)で代名詞、指示詞を取り挙げたときは、それらに〈 〉を付けて表わす。また例文の訳で、断りのないものはすべて筆者自身による訳であり、また例文中の下線もすべて筆者による。

2 中国語指示詞の研究史

2-1 馬氏文通（馬建忠）

馬建忠が著わした《馬氏文通》(1898年)（以下《文通》と略す）は、「中国人による最初の体系的な約33万字からなる古典中国語文法書」（鳥居1995：83）で、中国の文言を読み書きするために書かれたものである。従って、引用されている用例はすべて古典からのものである。

《文通》では代詞を、「指名代詞」、「接続代詞」、「詢問代詞」（現在の「疑問代詞」にあたる）、「指示代詞」の4つに分類していて、それぞれの項目に現れる代詞を整理してみると表1のようになった。

現代口語の指示詞〈这〉、〈那〉は出てこないのので、ここでは〈这〉、〈那〉に近い働きを持つ文語の指示詞で、現代の文章中にもしばしば現れる〈此〉、〈彼〉、〈之〉、〈其〉について、その解説を整理することにする。尚、例文の訳は例文(4)、(5)、(12)を除き、すべて『新釈漢文大系』による。

表1

分類と機能		代詞	
指名代詞	人 指 示 (人 称 代 詞)	發語者(第一人称)	吾, 我, 余, 予 朕, 台, 臣
		與語者(第二人称)	爾, 汝, 而, 若
		所為語者(第三人称)	彼, 夫, 之 (他, 伊, 渠)
	前 指 示	前文中の事物を指す	之, 其 此, 是, 斯, 茲 身, 親, 自, 己
接続代詞		其, 所, 者	
詢問代詞 (疑問代詞)		誰, 孰, 何 奚, 胡, 曷, 惡, 安, 焉	
指示代詞	逐指	每, 各	
	特指	夫, 是, 若, 此, 彼	
	約指	皆, 等, 諸, 凡, 慮	
	互指	自, 與, 相, 交	

〈此〉は、表1の「指名代詞」と「指示代詞」の「特指」のところに現れている。下の①が「指名代詞」の部分の、②、③が「指示代詞」の部分の解説である。

①前文中に現れた事物や、また近くにあつて指差しできるものに使う。主格、目的格、修飾格になることができる。

(1) 此亦妄人也已矣。(これは先方が無法な人間なのだ。[孟子離下])

(2) 賢者亦樂此乎。(賢者もやはりこれらのものを見て楽しむのでありませんか。[孟子梁上])

(3) 此心之所以合於王者何也。(この心が王者たるに合致するわけは、どうなのでありませんか。[孟子梁上])

②普通名詞の前に置き、目の前のものを指す。

(4) 非此母不能生此子。(この母でなければ、この子を生むことはできなかったであろう。[史記酷吏列傳])

③“如”と共に“如此”の形で、形容詞述語となり文末に置かれることが多い。

(5) 其自任以天下之重如此。(それが自ら天下の重要な任務を担うというのはこのようである。[孟子萬下])

例(5)は、『新釈漢文大系』では、最後の“如此”の部分が“也”1字だけで、それをもとにして訳されていたが、本稿での訳は《文通》に従い、訳は筆者自身によるものである。

〈彼〉は、「指名代詞」の「所為語者」(第三人称)と「指示代詞」の「特指」のところに現れる。次の①が「指名代詞」の部分の、②、③が「指名代詞」の部分の説明である。

①〈彼〉は文の主格となる。それに対して句の主格になるのが〈其〉である。また〈彼〉は目的格に使われることも多い。

(6) 彼丈夫也，我丈夫也，吾何畏彼哉。(彼も一個の男子である。私も同じく一個の男子である。どうして私が彼を畏れようや。[孟子梁上])

②普通名詞の前に置いて、指示対象が目前にないときに使う。

(7) 彼秦大將壇兵於外，而內有亂，則君臣相疑。（あの秦国の將軍たちは、国外において軍を思いのままに動かしているが、国内に混乱が起こるとなると、君臣の間に疑心暗鬼が生じてしまう。[史記刺客列傳]

③遠近前後を表すときには、〈彼〉、〈此〉2字を共に単独で使う。

(8) 以德若彼，用力如此，蓋一統若斯之難也。（徳によって統一することは舜・禹・湯王・武王のように、武力によることは始皇帝のように、思うに天下を統一することは、いずれにしても、このように困難なことなのである。[史記秦楚之際月表序]

〈之〉は、「指名代詞」の「所為語者」（第三人称）と「前文指示」のところに現れている。「所為語者」の部分では例文が一つも挙げられていない。次の①から③はすべて「前文指示」の部分の解説である。

①前文中の人や事物を指す。

(9) 愛公叔段，欲立之。（弟の公叔段を愛して世継ぎにしようと考えた。[左伝隠元]

(10) 請京，使居之。（京という所を所望して、そこに住ませた。[左伝隠元]

例(9)の訳は、『新釈漢文大系』によると、「公叔段」が「共叔段」と書かれていたが、本稿では《文通》に従って「公叔段」とした。

②単独で、主格、目的格、修飾格になる。特に修飾格のときは動詞“為”の後に置き「為之」の形をとることが多い。

(11) 之所以接下之人百姓者，（これがその下の一般民衆に接する場合には、[荀子王制]

(12) 臣師非有求人，人者求之。（私の先生は人をお願いをすることはなく、他の人が彼を求めるのである。[史記封禪書]

(13) 吾不徒行以為之擲。（わしは自分の車を売り、徒行までして、それでその外棺を買うことをしなかった。[論語先進]

例(11)、(13)の訳では、筆者がそれぞれ「これが」、「その」を補い下線を施した。例(13)のような修飾格となった場合は、「指示代詞」の〈此〉や〈是〉と同じ意味で使われ、この場合は「指名代詞」というより「指示代詞」といえる。

- ③「之+於」または「之+乎」を速く読むと〈諸〉になり、文章中ではよく「之於」・「之乎」に代わってこの〈諸〉が使われる。

(14) 子張書諸紳。(子張は大いに喜んで、忠信篤敬の四字を、大帯の垂れに書きつけ、常に目に触れる坐右の銘とした。[論語衛靈])

〈其〉は、「指名代詞」の「前文指示」と「接続代詞」のところに現れる。次の①から③が「指名代詞」における解説で、④から⑥が「接続代詞」における解説である。

- ①「指名代詞」のうちで前文を指すのに用いるのは、〈之〉と〈其〉が最も多い。そのうち〈其〉は「物」を指すことばで、この「物」には人も含まれ、また人が自分を指すときも含まれる。

(15) 今也父兄百官不我足也，恐其不能盡於大事。(今となって、父兄や百官が自分を信じないで、せっかく自分がやろうとすることも満足だとしないのである。これでは、結局この親の喪礼を十分に果たすことができないであろう。[孟子滕上])

- ②〈其〉が名詞を指す場合は、二つの用法がある。一つは句の主格となり、そしてその句が文の主語になったり目的語になったりする。二つ目は名詞について修飾格になる。

(16) 其為人也好善。(楽正子は)その人となりが善を好む人間だからである。[孟子告下])

この例では、〈其〉が句“其為人也”の主格になり、句全体が文の主語になっている。

(17) 王若隱其無罪而就死地，則牛羊何擇焉。(王が若しその罪なくして死地に引かれていく牛を痛み悲しむというなら、牛だって、羊だって、何のちがいないわけだ。[孟子梁上])

ここでは羊を表す〈其〉が句“其無罪而就死地”の主格になり、この句が条件文における動詞“隱”の目的語になっている。

(18) 今欲舉大事，將非其人不可。(いま、われわれは大事を挙げようとするには、將たる者がその器でなくてはだめだ。[史項羽本紀])

例(18)は、〈其〉が修飾格となった例である。訳では「器」を修飾しているように見えるが、「器(技量)をもった人」を意味し、「人」を修飾している。

③単独で目的格となることはあまりない。

(19) 孟嘗君使人給其食用，無使乏。(孟嘗君は人をやって、その者に食べ物を支給して奉養に事欠かないようにした。[戦国策齊])

例(19)の訳では、筆者が「その者に」を補った。

「接続代詞」は、前文を引き継いで、後文において自らが一つの句となる。〈其〉は後文の文頭に来る。

(20) 齊晉秦楚，其在成周微甚。(齊・晋・秦・楚の四国は、成周の時代においては、それらの国ははなはだ微弱な存在に過ぎなかった。[史記十二諸侯年表序])

例(20)の訳では、筆者が「それらの国は」を補った。

④先行詞が代詞であると、〈其〉はその先行詞に直接つづく。

(21) 此其過江河之流，不可為量數。(かくて、海が江河の流れに比べていかに大きなものであるかは、到底数量によって示すこともできない。[莊子秋水])

⑤先行詞が前文にあるとき、多くの場合〈其〉は後文における句の主格や修飾格になる。

(22) 有人於此，其待我以橫逆，則君子必自反也。(ここに一人の男があって、その男が自分を待遇するのに無理非道をもってしたとする。そういう時に、君子は必ず自分で自身を反省するのである。[孟子離下])

例(22)では、「人」が先行詞で、〈其〉は後文“其待我…自反也。”における句“其待我以橫逆”の主格になっている。

(23) 君子居是國也，其君用之，則安富尊榮。(君子がある国にいる時、その君がその君子の言を用いてくれば、その君は安富尊榮を得られる。[孟子盡上])

例(23)では、「國」が先行詞で、〈其〉は後続の句“其君用之”において、“君”(君主の意)の修飾格になっている。

代詞の章の解説において、たびたび出てくるのが主格、目的格、修飾格ということばで、代詞がこれらのうち、どの働きをしているかについて注意を払っている。このことから、《文通》では代詞の統語的役割に着目していることがわかる。これに対し、今日我々が指示詞を取り上げるときは、物理的、心理的、時間的などについての遠近の対立に着目することが多いが、《文通》では遠近に関する記述はほとんどない。今回調べた中では、唯一〈彼〉の③で遠近前後を比較するとき、〈此、彼〉を一緒に使うとする部分だけであった。当然、遠近による使い分けは当時でも存在していたはずであるが、《文通》では指示詞全体を遠近で二分するようなことはされていない。尚、今回調べた6冊の文法書中で遠近によって二分していたものは、王力の《中国現代語法》と高名凱の《漢語語法論》の2冊だけであった。

2-2 中国文法要略(呂叔湘)

《中国文法要略》(上巻1942年、中巻1943年、下巻1944年)(以下《要略》と略す)では、いわゆる代詞を「指称詞」または「称代詞」と呼び、「有定」と「無定」に大きく二分している。更に「有定」を「三身指称詞」(人称代詞)と「確定指称詞」(指示代詞)、また「無定」を「疑問指称詞」(疑問代詞)・「無定指称詞」(不定代詞)・「数量称代」に分けている。「指称詞」と「称代詞」の定義については何も書かれていないが、代詞のうちで、指示機能に着目したときはそれらを「指称詞」と呼び、代用機能に着目したときはそれらを「称代詞」と呼び分けているものと思われる。取り上げられている代詞を分類すると表2のようになった。本文および表中の括弧内は現在使われている呼び方である。

表 2

分類			口語	文語	
有定	三身指称詞 (人称代詞)	第一身 (第一人称)	我	吾, 我, 余, 予	
		第二身 (第二人称)	你	尔, 汝, 若, 而, 乃	
		第三身 (第三人称)	他(她/它)	之, 其, 彼, 伊, 渠	
		その他	複数	我们(咱们), 你们, 他们	吾侪, 此属, 汝曹 など
			相・見		相, 见
			尊称・謙称		(尊)子, 君, 公など (謙)臣, 仆, 奴など
			称名		自分の名前(謙称)
	確定指称詞 (指示代詞)	特指	这, 那	此, 之, 彼, 其	
		承指	这, 那	此, 是, 其, 彼, 斯, 兹, 夫	
		助指	这, 那	者	
		その他	複数	这些, 那些 这么些, 那么些	此辈, 彼等など
			容状・程度	这么样, 那么样	如此, 若彼など
			場所	这里, 那里	此, 彼
	時間		这会儿, 那会儿	尔, 兹	
無定	疑問指称詞 (疑問代詞)	人	谁, 哪个, 什么人,	谁, 孰	
		事物	什么	何, 奚	
		選択	哪+数量詞, 谁	孰, 何, 谁	
		状態	怎么, 怎样, 怎么样	何如, 如何, 奈何 など	
		原因・目的	为什么, 做什么, 怎么	何, 奚, 胡, 曷 何为, 胡为, 曷为 如何, 若何, など	
	無定指称詞 (不定代詞)	任指	谁, 什么, 怎么, 哪儿	何	
		虚指	谁, 哪, 怎么, 什么	某	

無定	数量称代	基数・序数	基数	(例) 一个, 几本; 一枝红的, 一块一钱多重的など	(例) 一以知十, 问一得三, 君取一、臣取二など
			序数	(例) 第一…第二…, 大的…二的…三的…など	(例) 其一…其二…, 其次…其次…, など
		総和・配分	全称	(例: 否定形のみ) 没一个…, 全都不…, 谁也不…など	无, 莫 (=无…者)
			偏称	(里头) 有…など	有…(之着) など
			他称	另外…, 别的…, 其他…など	余…, 他…など
			分称	有…的、有…的、有的…有的…など	有…者、有…者、或…或…など
			普称・各称	(例) 条条街上, 个个戏院子, 每天, 每年など (例) 各自, 各人, 一家有一家的…, 一时是一时的…など	(例) 非遇水旱之灾民则人给家足。每事, 每逢など (例) 各付各的, 人各有能有不能など
			隅称	(例) 一天上五课, 白米九十元一斗など	(例) (一) 斗米千钱, 十步一啄百步一饮など
		逐称	(例) 一代传一代, 一个个检查など	(例) 步步为营, 年年压金钱など	

ここでは「確定指称詞」(指示代詞)における〈这〉、〈那〉の用法について、記述を整理する。

はじめに「確定指称詞」の「確定」について次のような説明を付けている。この分類に属する「指称詞」は、それ自身が何を指すのかを決めているのではなく、ある状況の下ではじめて、その「指称詞」としての指示作用が働くのである。例えば、A、B二人の会話で、Aが「あの人」と言ったとき、Bは必ずしも誰であるか分るとは限らない。そこでBは「誰?」と聞き返す。そうするとAは、指でさしたり、顎を突き出したり、「我々がさっき会ったあの人だよ」などと言い、それによってBは気付くことができるのである。つまり、指示が成功するためには、「指称詞」が大事なのではなく、

指示を成功させる状況が大切なのである。今日の表現でいえば、「文脈(コンテキスト)」の重要性を当時すでに断っている。

「特指」とは、指差しをよく伴う指示のことと解説しているので、これはいわゆる現場指示にあたる。

- ①「特指」の〈这〉、〈那〉は、人や物を指すが、事柄は指さない。
- (24) 这本书名为小说，一点儿故事也没有。(この本は題名が小説であるが、一つの物語も載っていない。)
- (25) 你看，那是谁? (ねえ、あれは誰。)
- ② [这/那 + (数)量詞] の形式で、この後に続く名詞を省略できる。
- しかし文言ではこの用法はない。
- (26) 这篇文章比那篇 (文章) 好。(この文章はあれよりもよい。)
- (27) 此山望见彼山高。(この山よりあの山の方が高く見える。)

「承指」とは、先行発話を指したり、話し手や聞き手がはっきりと指すものが分かる場合の指示である。これはいわゆる文脈指示に近い。

- ③遠近の区別がはっきりせず、時として〈这〉または〈那〉のどちらも使うことができる。
- (28) 从前有一个富翁…那 (这) 个富翁买了一件古董…谁知那 (这) 个古董是假的…那 (这) 个古董商早已躲的不见面。(むかし一人の金持ちがいました…その / この金持ちが一つの骨董を買いました…なんとその / この骨董は偽物だったのです…その / この骨董商はすでに姿をくらまし会うことはありませんでした。)
- (29) 您别误会，我哪儿会说这 (那) 个话。(誤解しないで下さい、私が こんな / そんな こと言うはずがありません。)
- ④人名や地名などはもともと確定していて、更に限定するための要素を付けて指す必要はないが、このような固有名詞の前にも〈这〉、〈那〉を付けることがある。これは装飾的なもので、特に口語の場合に多い。
- (30) 却说这座涿州城正是各省出京进京必由的大路，(さて、この涿州

城は北京の出入りには必ず通らなければならない街道筋にあって、[兒女英雄伝：38回]

- (31) 那华忠急了，说，“这不是丢了吗？”（「これは無くなったのでございます！」とその華忠が慌てて言いました。[兒女英雄伝：38回]

「助指」では、〈这〉、〈那〉が他の修飾語を伴ってはじめて指定作用が働くと解説している。そうすると、修飾語を伴わない〈这〉、〈那〉では指定できず、どれ或いはどの人を指しているのかははっきりしないことになる。

- ⑤口語では〈那〉が多く、〈这〉はあまり多く使われない。通常は修飾語の後に〈这〉または〈那〉を置く。

- (32) 我说的这个人你也认得。(私が話しているこの人は、あなたも知っています。)

- (33) 墙角上那棵桂花树也开了。(塀の隅の上のあの金木犀も咲いた。)

- ⑥称代性(代用的)用法が、口語ではよく使われる。

- (34) 你昨天看的那本呢？拿来跟我换。(君がきのう読んだあの本は？持って来て私(の本)と交換して。)

「承指」、「助指」では、〈这〉、〈那〉の機能について、遠近がはっきりしないとか、同定しやすい固有名詞の前に装飾的に付けたりするとか、また他の修飾語を伴ってはじめて指定作用を持つなど、どれも〈这〉、〈那〉の指示機能が曖昧であるとか或いは指示機能が弱いことを説明している。

指示機能が弱くなるのは、口語ばかりではなく文語にもあることが記されている。文語の「承指」(文脈指示)では、その使用頻度は〈彼(それ・あれ)〉より〈此(これ)〉の方が多く、最もよく使われるのが〈其(それ)〉である。この〈其〉は「特指」(現場指示)では遠称指示詞であるが、「承指」(文脈指示)に転用されると「中性指示詞」のようであると、呂は表現している。ここでいう「中性」とは遠近の中間という意味ではなく、遠近が曖昧であるという意味で使われている。

ところで、三上(1976)では、日本語において、話し手が自分の先行発言について指示するときを「文脈承前」と呼び、このときは指示作用を失ったソ系指示詞が使われると記している。これを三上は「中称のソ」と呼んだ。中国語の文語における「中性の其」と日本語の「中称のソ」の間には、その機能の面において類似性が窺え、また呂と三上が共に近い時期に、異なる系統数の言語において同様の発見をし、似通った表現で呼んでいることは非常に興味深い事実である。

2-3 中国現代語法(王力)

『中国現代語法』(上冊 1943年、下冊 1944年)(以下《語法》と略す)では、代詞を「人称代詞」、「無定代詞」(現在の「不定代詞」にあたる)、「復指代詞」、「交互代詞」、「被飾代詞」、「指示代詞」、「疑問代詞」の7つに分類している。白話文の《紅樓夢》を基礎資料としているので、取り上げている代詞は、全体として現代中国語の口語のものに近づいている。解説の中に現れる代詞を分類してみると、表3のようになった。

表3

種類と機能		代詞	
人称代詞	第一人称	我, 我们	
	第二人称	你, 你们	
	第三人称	他, 他们	
無定代詞(不定代詞)		人, 人家: 别, 别人: 大家: 这, 那: 某, 等	
復指代詞(反射代詞)		自己	
交互代詞		相	
被飾代詞		者	
指示代詞	近称	单数	这, 这个
		複数	这些
	遠称	单数	那, 那个
		单数	那些
疑問代詞		谁, 那一个: 什么, 那一个	

更に「指示代詞」については、指示範疇と遠近により、表4のように細分している。

表4

指示範疇	近指(近称)	遠指(遠称)
方法	这样 这么, 这样, 这么着	那样 那么, 那样, 那么着
程度	这么个, 这么些 这等, 这么, 这样	那么个, 那么些 那等, 那么, 那样
場所	这里, 这儿	那里, 那儿
時間	这会子, 这会儿	那会子, 那会儿

ここでは「指示代詞」の〈这〉、〈那〉の一般的用法についての説明を整理することにする。

① 〈这〉、〈那〉は単独で主語になることができる。

(35) 这不是我那块玉。(これは私のあの玉ではありません。[紅樓夢：58回])

(36) 那不是林家的人。(あれは林家の人ではありません。[紅樓夢：57回])

② 〈这〉、〈那〉は目的語には使えない。目的語とする場合は〈这个〉、〈那个〉として使う。

(37) 也罢, 就说我叫你送这个给他去了。(やれやれ、私があなたに、彼女へこれをあげるようにさせたのだと言えばいいですよ。[紅樓夢：34回])

(38) 那个我不要。(それは要らないよ。[紅樓夢：19回])

上の例(38)は、目的語が文頭にきた倒置文とみている。

③事柄は形のないものであるが、〈这〉、〈那〉で指すことができる。時には〈这〉、〈那〉で指し、その原因を説明することがあるが、このときは“是”を伴う。

(39) 这是急气攻心, 血不归根。(これは慌てて朦朧となり、血の巡り

が悪いのです。[紅樓夢：13回])

- ④話の現場の事物は、形がなくて指差しができなくても〈这〉を使うことができるが、話の現場にない事物には〈那〉を使う。

(40) 这话不差。(この話は悪くない。[紅樓夢：45回])

(41) 为那玉也不是闹了一遭两遭了。(あの玉のために騒ぎが起ったのも一度や二度ではない。[紅樓夢：30回])

- ⑤ [这／那＋名詞] の形式で1つの意味単位になり、これを「仿語」³⁾と呼ぶ。この場合、意味の中心は名詞部分である。

(42) 这水又从何而来？(この水は一体どこからやってくるのだろう。[紅樓夢：17回])

(43) 那胭脂膏子也等我来再制。(その頬紅も私が来てからまた作ります。[紅樓夢：9回])

時には〈这〉、〈那〉の後に事物を表す名詞がなく、[这／那＋数量詞]の形式でその事物の代わりとなる。

(44) 那一种大约是苣兰、这一种大约是金葛。(そちらのはおおむねチャイランで、こちらのはおおむねジングウです⁴⁾。[紅樓夢：17回])

逆に、名詞や量詞の前に数詞が付いたときは、〈这〉、〈那〉を省略できる。

(45) 说着(这／那)二人便告辞。(話ながら二人は別れた。[紅樓夢：8回])

(46) 后来(这／那)两个竟是你疼我，我爱你。(後に二人はなんと愛し合っていたのです。[紅樓夢：58回])

- ⑥ 〈这、那〉、〈这些、那些〉が指示の意味をもたず、一種の冠詞のようなもので、専らある名称を取り上げるために使われる。

(47) 这抬爆竹的抱怨卖爆竹的捍的不结实。(この爆竹を手を取った者が爆竹を売っている者に、ちゃんと作っていないと文句を言った。[紅樓夢：54回])

(48) 比如那花儿开的时候儿叫人爱。(例えば、あの花の咲く頃は、人に愛を感じさせます。[紅樓夢：31回])

同様に、〈这〉、〈那〉を人名の前に付けることもあるが、修飾したり制限したりする働きはない。

(49) 原来这小红本姓林。(もともとこの紅さんは姓が林と言った。[紅樓夢：24回])

解説③で、「事柄は形がないが〈这〉、〈那〉で指すことができる」という表現から、〈这〉、〈那〉による指示の基本が形ある物を(指)差すことであると考えていることが分かる。③は、現在の言い方では、文脈指示用法についての解説である。

解説④では、物が話の現場にあるかどうか、また事柄が話の現場でのことかどうかで、〈这〉、〈那〉を使い分けるとしている。つまり、有形無形を問わず、話の現場であるか或いはそうでないかということが、〈这〉、〈那〉を使い分ける一つの基準であると考えていることがわかる。

解説⑤の例(45)や(46)では、[数詞+名詞]や[数詞+量詞]の形式で、〈这〉や〈那〉で指示することなく、対象を同定できることがわかる。

解説⑥の、〈这〉、〈那〉が指示の意味を持たず冠詞のような働きをすることについては、《語法》の1年前に出版された前節の《要略》でも、同様の記述がなされている。

また《語法》の中には、〈那〉に関係する後方照応についての記述がある。表4の「方法」の部分の解説で、〈那样〉を使った次のような後方照応の例を挙げている。

(50) 所以才商量着，作成那样假局子：我们爷儿三个人来，好把人家引进门儿来。(だからこそ相談して、そのようににせの場面を作ったのです、つまり我々父子三人がやって来て、よその人を門の中にうまく入れられるように。[兎女英雄伝：19])

石井(1998)では、調査の結果〈那〉についての後方照応が見つからなかったとし、宋(2002)や胡(2006)では、中国語には〈那〉に関する後方照応の用法はないと記している。実際の用例は非常に少ないであろうが、全くないわけではないことがこの例からわかる。

2-4 漢語語法論（高名凱）

《漢語語法論》（1948年）（以下《語法論》と略す）では、第二編「範疇論」のところで、第一章「指示詞」、第二章「人称代名詞」という章建てを行っている。

この「指示詞」という章題の命名について、次のように説明している。一般に文法学者は、指示詞を2つの観点から、二分している。一つは指示詞を独立して用いるか或いは名詞と共に用いるかによって、前者を「指示代名詞」、後者を「指示形容詞」と分ける。もう一つは遠近によって、「近指指示詞」と「遠指指示詞」に分ける。しかし中国語においては、言語構造の面から言うと、西洋語のような名詞と形容詞の語尾の違いはなく、従って「指示代名詞」と「指示形容詞」との分類は無意味であり、遠近の面から二分するだけでいいのである。そこで、これら「指示代名詞」と「指示形容詞」を合わせたものを「指示詞」と呼ぶことにしている。この説明から、《語法論》では指示詞を名詞と形容詞の機能を備えた新たな品詞として捉えていることがわかる。

日本では、佐久間鼎が『現代日本語の表現と語法』（1936年）で、当時代名詞の第三人称に入れられていたいわゆる指示詞を、代名詞の下位分類から外し、同書の改訂版（1951年）で、それを「こそあど」或いは「指示詞」と呼ぶことを提唱した。そしてそれ以降この「指示詞」という呼び方が急速に広まっていった経緯がある。日中両国で、近い時期に、「指示詞」を一つの新たな文法項目として捉え始めたことは、興味深い事実である。

《語法論》で取り上げている指示詞をまとめると表5のようになった。「近指」（近称）と「遠指」（遠称）に分け、口語のものは〈这〉と〈那〉だけである。〈这〉、〈那〉についての例文がそれぞれ7例ずつ列挙されているだけで、特に説明はない。

表 5

近指指示詞	口語	这
	文語	者, 遮, 只, 之, 斯, 兹 咨, 时, 是, 寔, 此, 底 厥, 其, 伊, 居
遠指指示詞	口語	那
	文語	爾, 若, 彼, 夫, 彼

《語法論》の「指示詞」に関する記述の特徴は、音韻と方言についての解説が詳しいことである。しかし、これらは本稿の目的とするところではないので、本稿では取り上げないことにする。

《語法論》の中に、〈这〉が最初に使われた典拠についての記述があるので、それをこの節の最後に記しておくことにする。劉淇の《助字辨略》によると唐代の韋穀の《才調集》に無名の人の詩として

(51) 三十六峯猶不見、況伊如燕這身材。(三十六の峰はまだ見えない、まして彼女のつばめのようなその姿はまだである。)

という表現があり、ここに出てきた〈這〉が、記録に見るところの〈这〉の最初であると説明している。

2-5 現代漢語語法講話（丁声樹その他）

1952年7月から1953年11月まで、《中国語文》に連載された「語法講話」を、連載終了後に改稿して出版されたのが《現代漢語語法講話》(1961年) (以下《講話》と略す)である。この中では、代詞を「人称代詞」、「指示代詞」、「疑問代詞」の3つに分類していて、それぞれに属する代詞は表6のようであった。

表6

種類と機能		代詞
人称代詞		我, 你, 他 自己 别人, 人家 大家, 大伙儿
指示代詞		这 那
	時間	这会儿 那会儿
	場所	这儿 那儿 这里 那里
	方法	这么 那么 这样 那样
	程度	这么 那么 这样 那样
疑問代詞		谁, 什么, 哪 多会儿, 哪儿, 哪里 怎么, 怎样

「指示代詞」の〈这〉、〈那〉について、その一般的用法を整理する。

① 〈这〉、〈那〉は単独で用いると、主語になることが多く、目的語になることは少ない。主語になるときは、一般に事物を指す。

(52) 班长, 这是我结婚的戒指! (班長, これは私の結婚指輪です。)

(53) [金桂] 跟婆婆商量说: “娘, 咱们还是把这箱子搬下去吧?” 婆婆说: “那碍你的什么事?” ([金桂が] 姑に相談して、「お母さん、私たちがやはりこの箱を運びましょうか」と言った。「そいつがお前さんの何か邪魔になるの」と姑が言った。[趙樹理])

また〈这〉、〈那〉が必ずしも簡単な名詞を指すとは限らず、文全体を指すこともある。

(54) “不要忘记东方” — 这是斯大林同志在七月革命之后的伟大号召。
(「東方を忘れるな」 — これはスターリン同志の七月革命後の偉大なる呼びかけである。)

② 〈这〉、〈那〉が人を表すときは、動詞はほとんどが“是”である。

(55) 爹! 这是那村的客? (父さん! この人がああの村の客なの。)

(56) 你知道那是谁！那是姚科长的女婿呀。(君はあの人が誰だかわからないの。あの人は姚課長の娘婿だよ。[楊朔])

③ 〈这〉、〈那〉が目的語になるときは、事物を指し、人は指さない。

(57) 可是我心里别的慌，坐也不是，站也不是，看看这，看看那，想想这，想想那，一点不定神。(しかし私は氣持を必死に押さえたが、居ても立ってもいられず、あれこれ見たり、あれこれ考えたりして、少しも氣を鎮めることができなかつた。[西虹])

④ 〈这〉、〈那〉を名詞の前に付けて修飾することができる。このときこの名詞には制限がなく、事物を表わす名詞でも人を表わす名詞でもよい。

(58) 他们很知道，这事是可以做，不可以说的。(この事はやっていいことではあるが、言つてはいけないことであることを、彼等はよく知つていた。)

(59) 那人民军战士指给武震看他们的城市。(その人民軍兵士は、武震に指示して自分たちの町を見させた。)

固有名詞の前にも〈这〉、〈那〉を付けることができる。

(60) 这趵突泉乃济南府七十二泉中的第一个泉。(この趵突泉は济南府の七十二の温泉のうち、最初の温泉である。[老残遊記])

(61) 站起来向外一望，那孔乙己便在柜台下对了门槛坐着。(立ちあがって、外の方を見ると、あの孔乙己がカウンターの下で、入り口の扉の敷居に向かつて坐つていた。[魯迅])

特に、[这／那 + (数)量詞 + 名詞]の形式で、〈这〉、〈那〉が名詞の修飾語となる場合が多い。

(62) 这门亲事，慢慢儿商量吧。(この縁談は、ゆつくりと相談しましょう。)

(63) 刚才你唱的那两句数板呀，可不坏。(さっき君が歌つたあの二曲の快板⁵⁾は、なかなかいいよ。)

[这／那 + 修飾語 + 名詞]の形式で、〈这〉、〈那〉と名詞の間に修飾語を挟むことができる。

(64) 谁能忘记那些艰苦的年月呢！谁能忘记那些吃尽千辛万苦创造胜

利的人呢！(あの苦しかった年月^{としつき}を忘れるものか。あの幾多の苦
 労を耐えて勝利をもたらした人を誰が忘れるというんだ。)

- ⑤ 〈这、那〉、〈这个、那个〉は、動詞や形容詞を修飾し、その程度が甚だしいことを表す。多くは後ろに“啊、呀”などの感嘆を表す語気詞を伴う。

(65) 一家子那哭啊，就别提啦。(一家のあの泣きようときたら、そりゃ大変なものだった。)

(66) 闷着头这个干啊，李春三也压不倒他。((彼は) わき目もふらずこれはやりますよ、李春三も彼を超えることはできません。)

- ⑥ 〈这、那〉や〈这个、那个〉を対で使うことがあるが、これは別に指示をしているわけではない。

(67) [人家] 不图这，不图那，就图你是个八路军干部，人品好。([あの人たちは] あれこれ望んでいるんじゃありません、ただ望んでいるのはあなたが八路軍の幹部で、人柄が良いということなんです。[袁静])

解説の①、③で、〈这〉、〈那〉が単独で目的語になる場合があることを示している。王力の《語法》では、単独で目的語になることはないと説明していた。

解説④はすべて、〈这、那〉を名詞の直前あるいは前方に付けて、名詞を修飾する場合について書かれたものである。特に固有名詞の前に〈这、那〉を付けることに関しては、《要略》では「裝飾的なもの」、《語法》では「指示の意味を持たず、冠詞のようなもの」と判断を加えて表現していたが、《講話》では事実を表記することに留めている。

表6における「程度」の〈这么(こんなに)、那么(そんなに、あんなに)〉、〈这样(このように)、那样(そのように、あのように)〉は動詞や形容詞を修飾する副詞的働きを持っているが、上の⑥により“么、样”の付いていない〈这〉、〈那〉自体に、すでにその働きがあることがわかる。

2-6 語法講義 (朱德熙)

《語法講義》(1982年)(以下《講義》と略す)における代詞の分類は、表7で示されている。表を見ると、代詞を3つの観点から分類していることがわかる。まず左から見ると、「人称代詞」であるか「指示代詞」であるかで二分し、次に上から見ると、疑問か非疑問かという点から二分し、最後に右から見ると、体詞性(名詞的)か述詞性(述語的)かという点から二分していることがわかる⁹⁾。また更に、欄の左右が対応していることもわかる。例えば〈我(わたし)〉、〈你(あなた)〉、〈他(かれ)〉に対してその疑問形が〈谁(だれ)〉、〈这(これ)〉や〈那(それ、あれ)〉に対しては〈哪(どれ)〉、〈这么(こんな)〉や〈那(そんな、あんな)〉に対しては〈怎么(どんな)〉、〈这(么)样(このような)〉や〈那(么)样(そのような、あのような)〉に対しては〈怎么样(どのような)〉が対応している。

表7

		疑問代詞			
		什么			
人称代詞	我 咱 你(您) 他	谁		体詞性	
	我们 咱们 你们 他们				
指示代詞	(A ₁) 这 那	(B ₁) 哪	述詞性		
	这儿(里) 那儿(里)	哪儿			
	这会儿 那会儿	多会儿			
	(A ₂) 这么 那么	(B ₂) 怎么			
	这样 那样	怎么样			
	这么样 那么样				

(朱德熙全集第1巻:93)

ここでは「指示代詞」の〈这〉、〈那〉に関する記述を整理する。尚、この章の例文の訳は、すべて朱德熙(2005b)による。

① 〈这〉、〈那〉は単独で主語となることができ、このとき人や事物を指す。

(68) 这是我们班长。(これは我々の班長だ。)

(69) 这是仪器厂, 那是图书馆。(これは精密機械工場、あれは図書

館だ。)

- ② 〈这〉、〈那〉が単独で目的語となることはあまりない。もし目的語になったときは、事物を指すことはあるが人を指すことはない。

(70) 你瞧这！(これを見ろ)

(71) 别说那！(それを言うな)

- ③ 〈这〉、〈那〉は「这／那＋(数)量詞」の形式で、そのまま単独で主語や目的語として用いたり、また名詞を修飾したりする。

(72) 这个／那个 (これ、この／あれ、あの)

(73) 这两本／那三本 (この二冊、この二冊の／あの三冊、あの三冊の)

- ④ 〈这〉、〈那〉、〈这个〉、〈那个〉、〈这份〉、〈那份〉が述語の前に置かれると、述語が表す事柄の程度が高いことを表す。語気詞の“啊”を伴うことがある。

(74) 你瞧他这份高兴。(ほら、彼のあの喜びようはどうだ。)

(75) 一家人那哭啊，看了真叫人心酸。(家族全員あの泣き方ときたら、とても涙なしには見ていられない。)

- ⑤ 〈那〉が主語の位置にあるときは、“要是那样的话(もしそういうことなら)” という意味を表すことがある。

(76) 那咱们就别去了。(それじゃあ行くのはやめにしよう。)

「指示代詞」には分類されていないが、〈这〉、〈那〉を使った時間表現について、次のような解説がある。

- ⑥ 〈这会儿〉は発話時や過去の一時点を指し、未来を指すことはできない。それに対して〈那会儿〉は、過去や未来の一時点を指し、発話時を指すことができない。

(77) 他多半天不说话，这会儿才开腔。(彼は長いあいだ何も言わず、そのときになってやっと口を開いた。)

(78) 到那会儿你就明白了。(そのときが来れば君にも分るよ。)

解説の②では、《講話》と同様に、〈这〉、〈那〉が単独で目的語になれることを示している。

《要略》、《語法》で扱われていた、〈这〉、〈那〉の指示機能の曖昧性や指示機能の低下に関する記述は、《講義》では全く触れられていない。

解説⑥の〈这会儿〉、〈那会儿〉

表 8

を使った時間表現では、それらが表すことができる時間範囲について、右の表8のようにまとめることができる。

	過去	発話時	未来
这会儿	○	○	×
那会儿	○	×	○

〈这会儿〉について、《講義》では未来を表すことができないとしているが、劉月華・潘文娛・故韡 (2001: 86) では、

(79) 明天这会儿，我们就放假了。(あしたのこの時間、私達は休みます。)

このような例を挙げて、前に未来を表すことばを付ければ、未来も表すことが可能であるとしている。しかし未来を表しているのはあくまでも“明天”であって、“这会儿”自身が表すものは現在と考えるのが妥当である。

3 まとめ

今回取り上げた六冊の文法書の指示詞に関する記述は、次のようにまとめられる。

- ①馬建忠の《馬氏文通》では、口語の指示詞(代詞)〈这〉、〈那〉は取上げられていない。
- ②呂叔湘の《中国文法要略》では、〈这〉、〈那〉の用法を「特指」(現場指示)、「承指」(文脈指示)、「助指」の3つに分けている。特に「承指」では、時に遠近の区別がはっきりせず、〈这〉、〈那〉のどちらも使うことができることを指摘している。
- ③王力の《中国現代語法》では、〈这〉、〈那〉のほかに、「指示代詞」を更に指示範疇の違いによって「方法」(〈这样〉、〈那样〉など)、「程度」(〈这么个〉、〈那么个〉など)、「場所」(〈这里〉、〈那里〉など)、「時間」(〈这会儿〉、〈那会儿〉など)の4つに分けている。有形無形を問わず、

話の現場の事物かそうでないかによって、〈这〉、〈那〉が使い分けられるとしている。

- ④高名凱の《漢語語法論》では、今回調査した文法書の中で唯一「指示詞」ということばを使って分類していた。ここでの「指示詞」とは、「指示代名詞」と「指示形容詞」を合わせたものである。
- ⑤丁声樹その他の《現代漢語語法講話》では、内容の面で王力の《中国現代語法》とかなり重なる部分があるが、それ以外では、程度が甚だしいことを表す〈这么〉、〈那么〉や〈这样〉、〈那样〉では、〈这〉、〈那〉自体がすでにその意味をもっていることを示す例を挙げている。
- ⑥朱德熙の《語法講義》では、〈这会儿〉、〈那会儿〉が表す時間範囲の違いについて断っている。時間範囲を過去、発話時、未来に分けたとき、〈这会儿〉は未来を表すことができず、〈那会儿〉は発話時を表すことができない。

今回の調査は、資料をすべて文法書としたので、代詞や指示詞に関する記述はほとんどが用法の分類や整理であり、指示機能に関する記述は多くなかった。しかしその中で〈这〉、〈那〉の指示機能の曖昧性や指示機能の低下については、《中国文法要略》、《中国現代語法》の2冊の本で取り上げられ、重要と思われるので、ここで再び重複なく整理しておくことにする。

- ①先行発話について指示するときは、遠近の区別がはっきりせず、〈这〉、〈那〉のどちらも使えることがある。
 - ②〈这〉、〈那〉が指示の働きを持たず、冠詞のように名詞（固有名詞の場合も含む）の前に付くことがある。
 - ③〈这〉、〈那〉が他の修飾語を伴ってはじめて指定されることがある。
- 概ね以上の3点にまとめられる。

日本語、中国語ともに指示詞について指示機能の低下の現象が現れ、2系統指示詞の中国語では、〈这〉、〈那〉の両方にそれが現れ、3系統指示詞の日本語では、ソ系指示詞がその役目を一手に引き受けているといえる。

それぞれの文法書では、ほとんどがいくつかの用例の羅列だけなので、今後さらに多くの用例を集めて考察する必要があると考えている。

注釈

- 1) 本稿の《漢語語法論》のように、代詞の下位分類とはせず、「指示詞」「人称代名詞」という品詞分類を行っている文法書もある。
- 2) 楊樹達の《高等國文法》(1930年)のように、「代名詞」が使われているものもある。
- 3) 2つ以上のことばを一緒にして1つの複合的意味のことばになるとき、この一緒にした一まとまりのことばを「仿語」という。例えば“小牛”は2語で、古代語の小さな牛を表す“犊”1語と同じ意味になるので、この“小牛”が「仿語」である。意味の中心は“牛”の部分である。
- 4) 「チャイラン」、「ジングウ」はともに香草である。
- 5) 竹で作ったカスタネットのようなもので拍子を取りながら、韻文を語ること。
- 6) 《語法講義》では「体詞」、「述詞」の章をそれぞれ設けている。代詞には体詞性のもので述詞性のものであるが、どちらも代替機能を備えていることから、代詞を「体詞」、「述詞」の2つに分けることはせず、「代詞」という1つの章にまとめている。

(例) 二年级同学去哪里了? 他们实习去了。

(例) 教室里不准抽烟, 这是学校的規定。

はじめの例では、「二年级同学」という体詞性構造を「他们」が代替し、2番目の例では、「教室里不准抽烟」という述詞性構造を「这」が代替している。

参考文献

- 石井誠 1998 「日中対照指示詞の研究」『国文学解釈と鑑賞』63巻1号
112-121
- 内野熊一朗 1969 『新釈漢文大系4 孟子』明治書院

- 王力 1985 《中国現代語法》商務印書館
- 高名凱 1951 《漢語語法論》開明書店
- 胡俊 2006 「日本語と中国語の指示詞についての対照研究—文脈指示用法の場合—」『地域政策科学研究』3 (鹿児島大学大学院人文社会研究科) 1-23
- 朱德熙 2005a 《朱德熙文集》(第1卷) 商務印書館
- 朱德熙 2005b 『文法講義』(杉村博文、木村英樹訳) 白帝社
- 宋曉雨 2002 「指示語に関する日中対照研究¹—觀念指示と文脈指示について—」『麗澤大学大学院言語教育研究科年報4』 17-33
- 立間祥介 1971 『中国古典文学大系47 兒女英雄伝』平凡社
- 丁声樹他 1963 《現代漢語語法講話》商務印書館
- 鳥居克之 1995 『中国文法学説史』関西大学出版部
- 馬建忠 1988 《馬氏文通校注》(章錫琛校注) 中華書局
- 三上章 1976 『現代語法新説』くろしお出版
- 吉田賢抗 1969 『新釈漢文大系1 論語』明治書院
- 劉月華・潘文娛・故韡 2001 《实用現代漢語語法》商務印書館
- 呂叔湘 2002a 《中国文法要略》《呂叔湘全集》(第一卷) 遼寧教育出版社
- 呂叔湘 2002b 「漢語語法論統集」《呂叔湘全集》(第三卷) 遼寧教育出版社 1-330